

がんサバイバーにおける女性医学 —産婦人科医にできること

企画者のことば

永田知映，岡本愛光

近年のがん治療の飛躍的な向上，がん患者の生命予後の改善とともに，妊孕性温存やがん治療後の妊娠・出産などのがん生殖の重要性は広く認識されるようになった。一方で，がんサバイバーにおける女性医学や性と生殖に関する健康のそのほかの側面については，十分に認知されているとは言えないのではないだろうか。Sexual and Reproductive Health and Rights (SRHR) がすべての人々に享受されるべき権利であることを考えると，国民の2人に1人が罹患するとされるがんの治療後においても，その特性を踏まえた適切な医療・ケアが開発・提供されるべきである。

各種がんやがん治療において，疾患や治療による影響を考慮し，そのうえで最大限に well-being や性と生殖の健康が担保されるように，私たち産婦人科医が果たしうる役割について幅広く認識される機会になればと，本企画を行った。手術，化学療法や放射線療法等により女性内分泌および生殖器は影響を受け，様々な不調や疾患が引き起こされる。2次性徴への影響，ホットフラッシュや閉経関連泌尿生殖器症候群 (GSM)，長期的には骨粗鬆症や心血管障害，認知機能への影響が懸念される。総論では，がんサバイバーシップ，がん治療の影響，包括的ケアと多職種連携について，産婦人科との関連を踏まえつつ，俯瞰的に論じていただいている。各論では，がんサバイバーシップにおける様々な課題のうち特に女性医学がかかわるものについて，対応策も含め詳説いただいている。いずれもその領域のエキスパートにご執筆をいただいた。

がんの診断と治療後の人生もその人らしく生きるために，産婦人科医ができることが幅広く認識され，実践される一助となれば幸いである。